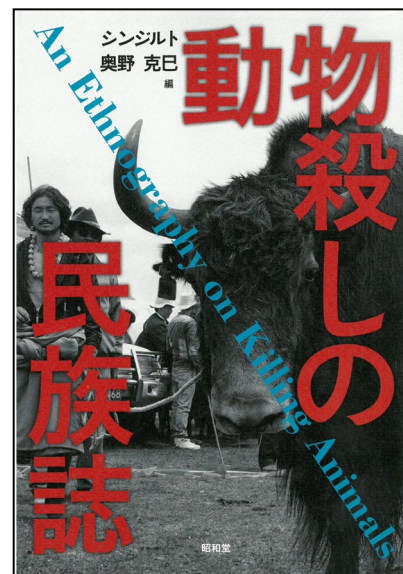


シンジルト・奥野克巳編著『動物殺しの民族誌』、京都、昭和堂、2016年、365頁、5,800円＋税

辻 貴志

本書は、世界の動物殺しを主題とした日本初の学術書であり、人々の生活世界と動物殺しの関わり方について民族誌的観点から考察している。家畜や野生動物を殺す行為の他、狩猟・漁撈・屠畜・供犠を包摂した用語と定義されている「動物殺し」であるが、家畜を屠るという行為には尊敬あるいは差別の対象となるなど、社会や文化によって態度が大きく異なる。本書の目的は、これまで動物殺しの主軸とされてきた供犠や狩猟の実践者たちの経験から、動物殺しの諸相を再評価し、動物殺しの実践における多種多様な現象と考え方を読者に伝えることで、動物殺しに対する自らの範疇とは異なった世界観や多様な生命観などに対する理解を深めさせることである。本書は以下の3部9章から構成される。



序 肉と命をつなぐために (シンジルト)

第Ⅰ部 動物殺しの政治学

- 第1章 儀礼的屠殺とクセノフォビア——残酷性と排除の文化政治学 (花渕馨也)
- 第2章 子殺しと棄老——「動物殺し」としての殺人の解釈と理解について (池田光穂)
- 第3章 殺しと男性性——南部エチオピアのボラナ・オロモにおける「殺害者文化複合」(田川玄)

第Ⅱ部 動物殺しの論理学

- 第4章 狩猟と儀礼——動物殺しに見るカナダ先住民カスカの動物観 (山口未花子)
- 第5章 毒蛇と獲物——先住民エンベラに見る動物殺しの布置 (近藤宏)
- 第6章 森と楽園——ブラガの森のプナンによる動物殺しの民族誌 (奥野克巳)

第Ⅲ部 動物殺しの系譜学

- 第7章 供犠と供犠論——動物殺しの言説史 (山田仁史)

第8章 狩猟・漁撈教育と過去回帰——内陸アラスカにおける生業の再活性化運動(近藤 祉秋)

第9章 優しさと美味しさ——オイラト社会における屠畜の民族(シンジルト)

第I部は「動物殺しの政治学」がテーマで、屠殺、子殺し、姥捨、男性性をキーワードに、人間社会の政治性と動物殺しの関連を考察する。第I部の特徴は、動物殺しにヒトを含めている点である。動物殺しと人殺しは、別の文脈で議論されるべき問題かもしれないが、本書では政治的問題が大きく絡んでいるとして、動物殺しを考える上で人殺しもまた「殺し」という動物にほぼ普遍的に備わった究極の行動についても究明されなくてはならないという立場を取る。

第1章では、フランスの屠畜における儀礼的屠殺に焦点を当てている。本章では儀礼的屠殺を神の法に基づきユダヤ教徒やイスラム教徒が行う、気絶処理をしない生きてまま動物を屠殺する手法と定義する。ユダヤ教とイスラム教においても儀礼的屠殺は教典に則った手順で行われ、解体の手順や祈りがそれぞれ定められている。一般に気絶処理が行われることはない。気絶処理を行うと屠殺の手順で動物の死がもたらされると見なされ、教義に反することになる他、瀉血も不十分になる。フランスの畜産業界では従来、気絶処理による屠殺が行われ、ユダヤ教徒やイスラム教徒という文化的に受け入れがたい異教徒が行う儀礼的屠殺として一般民衆(おそらく多くのキリスト教徒)の反発が起きている。儀礼的屠殺が野蛮であるとされるフランスでは、気絶処理は動物の苦痛を和らげ、異教徒の屠殺方法と区別あるいは差別し、屠殺を正当化する手段でもあった。しかし、近年、実際にフランス国内で流通している普通に食される肉が食肉業者の不正により、本来そうあるべき気絶処理がされていないことが判明した。こうした気絶処理を人道的とする社会に対して屠殺方法の実態が矛盾した点を切り口に、儀礼的屠殺への反感を利用して移民排斥を目論んだフランスの政治事情が大きく揺さぶられたことを本章は皮肉的に明らかにしている。

第2章では、動物殺しの一環として殺人を相対化するため、人間の子殺しと老人殺しについて、動物(霊長類)の子殺しの事例と民族誌を援用し、動物殺しとの類似性を検討する。まず、子殺しと老人殺しは伝統社会だけに限らず、現代社会でも暴力やネグレクトとして確認できることに釘をさす。その上で、伝統社会の事例としてパラグアイの先住民アチェを取り上げる。アチェの間では、共同体内部に死者が出た際に共同体内部の女兒を中心に殉死が行われる。女兒が殉死の主な対象となるのは男児選好の文化によるという。また、落雷によって死亡した赤ん坊のための復讐として隣の家族の乳児が殺害される、復讐の情念に取り憑かれた隣人の男性が隣家の息子を弓で射て殺害するといった復讐の連鎖として代父が義理の娘を殺害する理不尽とも思える各事例を紹介する。アチェの社会では老人殺しや遺棄も確認されているが、池田はアチェの社会におけるこうした殺人についての具体的理由については慎重な姿勢を取っており、従来のエネルギーやコストの観点からの研究結果を留保し、我々とはかけ離れた感情があることを指摘するに留めている。一方で池田は、我々とは違って死者への愛惜や生への執着がないというわけではないとも指摘する。アチェの社会において殺人が正当視されるケースがあり、我々にとって不条理と思われる形式の殺人は、猟の成立となり得ると見なされ、殺害が不猟の危機の回避となるよう

であれば至極正当な行為とみなすというロジックが確認できる。アチェのロジックには、共同体の弱者を殺害することで、超自然に贄を差し出すという思考があると読み取ることができる。本章は、霊長類の子殺しと人間の殺害が、共に殺される側の存在を差別化することで成り立つという「動物殺し」の構造を明らかにし、より具体的にアチェの事例を取り扱うことで殺害が殺される側の存在の差別化によって可能になるという論理を補強している。

第3章では、エチオピア南部のオロモ系ボラナ社会の「殺害者文化複合」について動物殺しの観点から検討する。「殺害者文化複合」とは、北東アフリカ地域の諸社会に見られる敵の殺害を巡る観念と諸実践群を指す。より具体的には、動物の供儀、狩猟、嬰兒遺棄、戦いなどの殺しが該当し、ボラナ社会における動物と人への殺害文化全般を意味する。本章では、この文化複合について「男性性」の側面から捉え、動物やヒトの殺害を通して男性がいかに社会的に認められた男性になっていくかというボラナ社会の通過儀礼的行為や慣習に焦点が当てられる。「男性性」とは、ボラナ社会において男性が「男であること」や男性として社会を再生産する「父性」のことで、男性は殺害者文化複合を経験することによってのみ男性性を獲得できる。現代のボラナ社会では狩猟は禁止されており、本章では敵との紛争についても過去数十年の敵の殺戮についてのみ語られている。嬰兒遺棄も禁止されているが、嬰兒遺棄はウシの供儀と同様に豊穰性をもたらすと考えられている。また、過去の戦いでの殺しでは、殺傷する相手は青年男性に限られ、家屋の焼き討ちもしなかった。現代では儀礼や伝承を介して殺しの実践的行為は擬似的行為として、ボラナ社会で世代や年齢ごとに分類される社会階梯集団としての世代組や年令組によって家畜の供儀などを通して年長者から若者へと継承されている。嬰兒遺棄の禁止、狩猟の低迷、家畜供儀の減少などで殺害者文化複合は稀になったが、ボラナの男性性を獲得するこの文化複合が、隣接する敵対集団の青年男性だけでなく女性や子供にまで及ぶという変化が起きている。

第Ⅱ部は「動物殺しの論理学」をテーマに、動物殺しの方法を規定する論理について考えるにあたり、よりミクロな社会的文脈から解き明かしていく。ここではミクロな社会で行われている動物殺しやその方法が、どのような論理に支えられて人々の規矩となっているのか明らかにする。そして、動物と人との超自然的な相互作用まで検討する。以下、儀礼としての動物観、動物と人の緊張関係、環境としての動植物の作用を各論文が報告し、動物殺しに影響を与える論理について究明する様を概観しよう。

第4章では、狩猟民であるカナダ先住民カスカの狩猟対象である動物に対する動物観を、彼らの狩猟と狩猟儀礼から明らかにする。カスカは、人間が有能だから動物を狩猟できると考えるのではなく、動物との親和性によって動物の方が人間に身を捧げると考えている。そして、その見返りとして常に動物の存在やありがたみを意識して狩猟と狩猟儀礼を行い、動物との絆を構築することで狩猟の成功や動物の再生産につなげ、動物への感謝と動物とのつながりを維持するのがカスカの動物儀礼の根幹である。動物の肉や毛皮を対象にするカスカの動物殺しは、動物の種類により儀礼の有無が生じるものの、基本的に儀礼によって動物は肉体を人間に差し出す。我々のように動物を殺すことで罪悪感や贖罪意識が生じるのではなく、動物への対応を誤れば不猟が続くことがあるなど、動物とのコミュニケーションの下で動物殺しが実践されている。このように、本章では動物とのつながりを維持

するために必要不可欠な狩猟儀礼によって、自分たちの繁栄を願うカスカの死生観を明らかにしている。

第5章では、パナマ共和国の先住民エンベラが行う森での動物殺しについて、毒ヘビとその他の動物の殺し方に対する捉え方の差異に着目し、エンベラが多様な存在と関わり合っていることを示そうとする。動物は殺さずに保護しなければならないという西洋の言説とは異なり、エンベラにとって動物を殺さないことは不可能で、特に毒ヘビは見つけたら即座に殺すべき対象として認識されている。人間側に危害を加える動物は、食用にされなくとも殺される。そこには超自然的な動物との関係性は見出されない。エンベラの狩猟ではイヌを用いたり、動物の痕跡を人間が追い求めたりするが、動物との遭遇はその狩猟者が動物にとって魅惑的な存在であることなども関連しているという。一方で、ヘビの毒によって命を落とす人々もいることから、毒ヘビとの遭遇においては共同体や自己の安全を確保するため頻繁に殺す。これらのやり取りは、動物殺しの文脈において人間が常に殺しの主体というわけではなく、客体にもなりうることを示している。近藤は、動物の魂や霊的な主との関与は希薄であり、出会う相手が「危険」かどうかであることに端を発するエンベラの動物殺しにおいて、毒ヘビによる被害者が多数出ている環境にいることから、エンベラが特に毒ヘビとの関係において緊張状態にあると説明する。

第6章では、ボルネオ島の狩猟民プナンの狩猟活動としての動物殺しに焦点を当てる。プナンはあらゆる野生動物を狩猟の対象とし、野生動物は発見し次第、戸惑うことなく殺しを遂行する一方で、プナンの狩猟は動物や樹木の働きかけに応答することで達成されている。プナンの狩猟は、吹き矢、槍、山刀を用い、犬を同行して行われる他、獲物の通り道を予測して狙う待ち伏せ猟が行われる。また、本章では動物の中でも鳥に着目し、鳥は動物が食する果実の到来と動物の行動を人間に知らせる自然暦のようなものと考えられていることから、該当の鳥を目撃することは狩猟の合図とされる。プナンは、このように環境の機微な変化と動物の習性に応答することで、森の中での狩猟を実現してきた。しかし、プナンの森は国策による自然開発により油ヤシのプランテーションとして拡大しており、狩猟と採集に依存してきたプナンの狩猟採集活動の余地は大きく狭まった。それにも拘らず、樹木や野生動物への応答として行われるプナンの狩猟は変わらず、油ヤシのプランテーションを狩猟域として継続されている。特に、待ち伏せ猟による狩猟は新たな狩猟環境に適しており、ヒゲイノシシや胃石を目当てとしたヤマアラシを主な狩猟対象とするようになった。本章では、筆者は、環境が変われども、環境の機微と動物の習性を読み取ることでプナンの動物殺しが実践されていることを明らかにした。

第Ⅲ部は「動物殺しの系譜学」がテーマであり、供儀、狩猟、屠畜など動物殺しの主要テーマと生活世界との関わりについて明らかにする。どのトピックも動物の肉を原初的に消費する方法であり、動物の肉と宗教との関係、先住民にとっての狩猟の重要性、牧畜民の肉をおいしくする屠畜法が検討され、動物殺しの本質的事象を取り上げている。

第7章では、宗教的儀礼としての動物殺し、すなわち供儀について文献資料を用い世界各地の事例を検討する。山田は、供儀は旧約聖書やヴェーダ文献にも記され、牧畜文化を背景にしていることを解き明かす。そして、民族学的資料をもとに地中海世界、イスラム圏、東南アジア、東アジアでの供儀の事例を列挙する。その結果、供儀とは人類が狩猟採

集の時代から行ってきた動物殺しの行為を宗教的文脈において儀礼化したものと説明する。特にユダヤ圏とインド圏で供儀が踏襲あるいは記憶されていることは確かである。なお、供儀は動物殺しの過程を儀礼化したものだが、現代では動物愛護や経済的な理由から縮小傾向にあり、供儀としての動物殺しの在り方が問われている。

第8章では、アラスカ先住民を事例に、近代世界システムの中で薄れゆく動物殺しとしてのヘラジカやカリブーを中心とした動物や水鳥の狩猟とサケを中心とした漁撈技術やベリーの採集技術を維持するため、若者に狩猟・漁撈技術などを教える文化キャンプで、「過去回帰言説」のもと実践される動物殺しを中軸に据える。文化キャンプは、人間と動物との関係が親密だった白人到来以前の社会を動物殺しの規矩として、現在の狩猟・漁撈環境に活用する試みである。狩猟・漁撈教育への取り組みは、白人到来以前の生業とその後の貨幣経済が混ざった混合経済下における生業活動に対する適応方法と考えられる。つまり、「過去回帰言説」とは、白人社会に対し、先住民が白人到来以前の理想的な社会の復活を主張する運動であり、文化キャンプは白人到来以前の彼ら主体の自律的な社会への回帰を達成する日のための準備と言える。以上、近藤は、アラスカ先住民は近代の中に浸かりつつも、その中で生き抜くために様々な資源や機会を利用し、狩猟と漁撈の生活を続けてきたと評価している。

第9章では、中国西部の牧畜民オイラトの屠殺に着目し、家畜の肉のおいしさと屠る行為のやさしさについて検討する。オイラトの自治県では地域ごとに屠畜方法が違い、その違いによって家畜の肉の味が異なることを彼らは認識している。現代では、オイラトの自治県では動物愛護の観点から必ずしも徹底されていないが「電撃」による屠畜法が導入されている。また、従来行われてきたモンゴル式「腹割き法」、イスラム式「放血法」、チベット式「窒息法」という伝統的屠畜方法は、肉の質の問題や人類に普遍的な動物愛護の観点を有しない有機牧畜業の専門家からは粗野なものとして位置づけられている。しかし、どの屠畜方法も家畜に対するやさしさと動物に対する慈悲が深く関係しており、地域ごとの価値観に従った家畜へのやさしさを屠殺方法に反映している。一方で、屠畜方法の違いにより肉のおいしさが決まるという価値観も集団ごとに共有されており、肉のおいしさと屠畜方法のやさしさは相関するという。

以上、本書は動物愛護や動物福祉といった価値観が台頭しつつある現代社会で、動物殺しというタブー視あるいは疑問視されつつある問題に挑んだ挑戦的な書である。特に、動物の屠畜に目を背けるが肉を好んで食する人々、食肉業者に対する偏見を抱く風潮、動物虐待が止まない世相に対する挑発の書とも評価できる。本書は動物殺しについて、本書に登場する伝統的な社会だけでなく、人間社会全体に当てはまるものと捉えて論を進め、動物を殺すという行為あるいは営為が、どのような人間側の都合や動物と人間の関係性の下で行われているのかについて「政治学」「論理学」「系譜学」をキーに民族誌的にあぶり出し解明しようとしている。本書の言葉を借りると、動物殺しにおける秩序の形成と解体、動物と人間との交渉、動物と人間のつながりについて追求するという枠組みによって、今日における動物の殺し方と動物を殺す意味を考究している。

いずれの論考においても、動物を殺すこととは一体どのような行為であり価値観であるのか文化的側面から追求する内容となっている。動物殺しは人間側が生きるために執り行

う必然の行為であり、人類は動物の生産から消費まで担ってきた。本書では神や自然のもとで行われる動物殺しの本質に関する論考が多く収録されており、そこには動物解放という相対する概念が存在する。動物解放とは、人間の利益のために動物を利用したり搾取したりすることへの批判である。特に動物殺しにおける動物への苦痛が問題視されるが、本書で取り上げられた論考の中には動物を「やさしく」殺す事例も確認でき、本書に現れた社会は「道徳」を以って動物を殺していることが明白である。動物を道徳的に殺す点において、「動物殺し」という表現は過激であるが本書に所収の各論文を読むことで動物解放や動物愛護に共通する思想が窺える。人間の利益のために動物を殺すという実践が当然視されている現代社会で動物解放の姿勢は見受けられない点について、反証すべき点が多く、本書を叩き台とした今後の議論や研究を待ちたい。また、動物殺しが狩猟行動や供儀など文化として人間に埋め込まれた性質であることも本書は確認しているが、人間中心主義的に書かれているわけではなく、動物側からの働きかけにも注目し、動物とのコミュニケーションのもとに動物殺しの文化が成り立っていることを民族誌的に言及している。動物殺しとは、動物解放や動物愛護が陥りやすい動物を殺す側に非難の目を向ける立場を超越して、動物を殺すこととはどのような道徳的意味があるのかを追求する営為であり思想であることを本書は伝えようとしている。

本書は、伝統的社会における動物殺しの事例について報告したものであるが、同時代の我々の動物殺しに関する無感覚に思われる意識に問題を投げかけている。例えば、動物殺しに対して過剰に反応する動物愛護団体や、食肉業界など現代生活において必要な動物殺しの実情を知らず過敏に同情してしまう我々に対して、動物殺しの尊さと必然性を説こうとしている。その証拠に、本書には動物の気絶処理や殺し方の質に関する論文を多数引用し、人間が生を営む上で動物殺しが不可避であり、人は動物に対する尊厳を屠殺過程に表現するしかなかったことを説明している。

一方で、本書に登場する民族は社会的少数集団であり、そこでの現象を人間全体に当てはめるべきではないと批判することもできる。確かに伝統社会の文化を劣ったものと見なし、その動物殺しの在り方に対して野蛮であり、前時代的であるという見方をすることもできるが、本書に登場する社会は、我々より動物との関わりを社会文化的に深く刻んできた点で動物殺しを始めとする「殺し」の問題について学ぶべき点は多いにある。

本書は動物殺しについて考える第一線の研究者を集め編まれたものであり、動物殺しに関する多彩な論考を収録している。ただし、本書は「民族誌」という形式をとると謳いながらも、その実、収められた論文の多くは抽象化された論理の抽出を目指すものであり、評者には具体性に乏しく物足りないと感じられた。とはいえ、本書は動物殺しについて扱った学術書として極めて価値があり、人間と動物の命について、いずれかに優位性を認める志向性を持たない伝統社会と現代社会を対比することで、動物の命を奪う方法や虐待をめぐって現代社会で展開される行き過ぎた動物保護の議論をも相対化することが可能となっている。その上で、本書は、動物を殺すことに対する知と人間性を深めていく上で重要な書と評することができる。